

FD 関連研修会 参加報告書

主 催	大学教育学会
企画名称・テーマ	第 33 回(2011 年)大会 「大学教育の質とは何か —ふたたび大学のレゾナードールを問う—」
開催日時<会場>	2011 年 6 月 4 日(土)、5 日(日) <桜美林大学>
参加者所属	教学部 教育開発課

参加報告

1. 研修会の目的

大学教育の質保証の課題は、日本の高等教育の最重要課題とされる中で、シラバスや GPA 制度の導入、成績評価の厳格化など改革が行われてきた。これらの手法は、質保証の基本的な考え方や全体像においてどのように位置づけられるのか、「何のための、誰のための質保証」なのかを考える。また、高齢化社会の到来による、生涯発達という観点からも大学教育の意味を問い直す。

2. 研修の概要

1 日目は、シンポジウム I「現代における生涯発達と大学教育」、基調講演「何のため、誰のための質保証」、シンポジウム II「大学教育における質保証の実践的展開とその意味」がおこなわれた。

2 日目は、ラウンドテーブル形式でおこなわれ、「学生の理解を深める教授学習(deep approach)」に参加した。ここでは、近年の大学教育の重要な方向性の1つとなっている「学習者中心の教育」におけるアプローチの1つである学生の理解を深める教授学習について、基本コンセプトや試行的な実践事例を話題として提供し、その意義や方法についてグループワークをおこなった。まず、「学生の理解を深める教授学習(deep approach)とは何か、基本コンセプトの説明がなされた。次に、「学習者中心の授業におけるピア評価と中間アンケートによるフィードバックの効果」について話題提供がなされた。ここでは、英語授業のプレゼンテーション科目におけるピア評価を事例とし、発表者プレゼン中に他の学生は用意された各項目のポイントを記入し、プレゼン後にコメントを記入。その後、学生から学生へ、教員から学生へという2つの方法でフィードバックされるという形式である。また、中間アンケートについては、教える側と学ぶ側の貴重なコミュニケーションと解釈し、学習者自身が学習姿勢について気づき、授業が学習中心であることの再確認ができるという役割があるとまとめている。ピア評価については、他者へのフィードバックを書くことによって自己の振り返りも同時に行え、さらに学生間・学生と教員間のコミュニケーションにもつながるという効果を提示している。

最後に、「グループ学習の運営にかかる授業支援教材の開発と講義型授業における”deep approach”」という実践事例の紹介がなされた。

グループワークにおいては、アクティブラーニングについてが主な話題となり、講義における効果的な取り入れ方とは何かについて議論がなされた。

3. 本学のFD活動における検討課題

講義において、より深い理解へ学生を導くにはどうしたらよいのか、を検討していかなければならない。本学でも授業アンケートでも学生へのフィードバックを検討し、より学生の記述が反映されているという実感を持ってもらうこと、手ごたえを感じてもらうことが重要だと考える。